

# 資質・能力の育成に資する生活科の授業づくり

## — 児童の「気付き」の質を高める学習指導の構想の視点 —

明星大学教育学部教育学科 特任教授 相 原 雄 三

### 抄録

2017（平成29）年の小学校学習指導要領は、全ての教科等の目標及び内容について「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から成る資質・能力で再整理して、「何ができるようになるのか」という育成を目指す資質・能力を明確に示した。生活科においても、育成を目指す資質・能力が明示され、その育成に資する授業づくりが求められている。そこで、本稿では、まず、これまでの小学校学習指導要領の改訂において生活科の学習指導上の課題として示されたことを確認する。次に、いくつかの先行研究を取り上げ、児童の資質・能力として「考える」ことを重視して「気付き」の質を高める学習指導の考え方について概観する。そして、これらのことを踏まえて、最後に、「資質・能力の育成に資する生活科の授業づくり」における、「児童の『気付き』の質を高める学習指導の構想の視点」についての知見を述べる。

キーワード 資質・能力の育成 生活科 気付き 学習指導の構想の視点

### 1 はじめに

1989（平成元）年の小学校学習指導要領において、これまでの低学年における社会科と理科を廃止し、生活科が新設されてから30数年が過ぎた。1989（平成元）年発行の小学校指導書「生活編」の「第1章 生活科の新設」の中で、この改訂について「戦後40年にして、小学校では初めて教科の改廃がなされた。それだけに、この改訂は、かつてなかった小学校教育の大きな変革であるということが出来る」<sup>1)</sup>と述べられている。それ以降、小学校学習指導要領は3回の改訂を経て今日に至っている。

生活科は、具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養うことをねらいとする教科であるため、児童にとっても「好きな教科」「楽しい教科」の一つになっている。例えば、野田（2005）が、生活科導入時の小学校学習指導要領下で学んだ児童・生徒（小学3・6年生、中学3年生、高校3年生）を対象に実施した「生活科で育った学力についての調査研究」（2003年11月～12月実施）<sup>2)</sup>では、生活科の授業の好き嫌いの受け止めについて、「大好き・好き」と肯定的な回答の割合は82%であった。また、松永（2018）が、1998（平成10）年の小学校学習指導要領下で学んだ大学生を対象に実施した生活科に関する意識調査<sup>3)</sup>では、生活科のイメージについて自由記述した内容を帰納的にカテゴリー分析した結果、最も多いイメージは、「植物を育てる、昆虫を観察するなどの『自然体験』（25.8%）」、次いで多いイメージは、「楽しい、面白い、楽しかったなどの『楽しい』（16.4%）」であった。

その一方で、児童の具体的な活動や体験を重視する学習指導を行う傾向が強くなることで、児童は楽しく活動はしているが、価値ある学びを実現する学習指導が行われているのかという批判もある。例えば、關（2008）は、「子どもたちが楽しい活動をして終わるだけで、学習対象に対する認識が深まらないとか、『活動あって思考なし』など、否定的な声も多い」<sup>4)</sup>と指摘している。また、山田・桑原（2022）は、「活動や体験を重視するあまり、児童の思考や認識を軽視したため『活動あって学びなし』との批判がなされるようになった」<sup>5)</sup>と指摘している。

2017（平成29）年の小学校学習指導要領は、「育成を目指す資質・能力を明確にし、教育目標や教育内容を再整理する」<sup>6)</sup>という方針の下に改訂され、生活科においても「何ができるようになるのか」という育成

を目指す資質・能力が明示された。また、「活動あって学びなし」との批判があることから、学習内容についても、具体的な活動や体験を通して、どのような「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指すのか具体的にできるように、各内容項目が見直された。<sup>7)</sup>

そこで、本稿では、資質・能力を一層確実に育成することを目指す2017(平成29)年の小学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、「資質・能力の育成に資する生活科の授業づくり」における、「児童の『気付き』の質を高める学習指導の構想の視点」についての知見を述べることにする。そのため、まず、これまでの小学校学習指導要領の改訂において生活科の学習指導上の課題として示されたことを確認する。次に、いくつかの先行研究を取り上げ、児童の資質・能力として「考える」ことを重視して「気付き」の質を高める学習指導の考え方について概観する。そして、これらのことを踏まえて、最後に、「児童の『気付きの質』を高める学習指導の構想の視点」についての知見を述べる。

なお、本稿では引用部分を除き、元号の数字はアラビア数字に統一した。

## 2 生活科の学習指導上の課題

生活科は、児童の生活圏にある人、社会、自然を学習の対象や場として、自らが環境の構成者であり、そこに生きる生活者であるという立場から、それらと直接関わる具体的な活動や体験を通して様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいとしてきたところに、その特質がある。この教科としての特質は、1989(平成元)年の小学校学習指導要領で生活科が新設されて以降、1998(平成10)年、2008(平成20)年、2017(平成29)年と3回の改訂を経て現在に至っているが新設時から変わらない。

ここでは、表1)のように小学校学習指導要領における生活科の教科目標と新設及び改訂の趣旨等の変遷を整理して、生活科の学習指導上の課題として示されたことを確認する。(表の中の下線部分は各年代の改訂の際に、新しく変更・加筆された文言である。また、波線部分は、以下の(1)と(2)の本文と関係する文言である。)

表1) 生活科の教科目標等の変遷

学習指導要領	教科目標	新設及び改訂の趣旨等
1989年 (平成元年)	具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。	〔新設の趣旨〕 ①低学年児童には具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がみられるので、直接体験を重視した学習活動を展開し、意欲的に学習や生活をさせるようにする。 ②児童を取り巻く社会環境や自然環境を、自らもそれらを構成するものとして一体的にとらえ、また、そこに生活するという立場から、それらに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるようにする。 ③社会、自然及び自分自身にかかわる学習の過程において、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにさせる。 ④上記の3つの事項は、学習や生活の基礎的な能力や態度の育成を目指すものであり、それらを通じて自立への基礎を養うこととする。
1998年 (平成10年)	具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。	〔改善の基本方針〕 ①低学年児童には、身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視する。 ②直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切に <u>する指導が行われるようにする。</u> ③各学校において、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や、重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにする。

2008年 (平成20年)	具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。	<p>[改善の基本方針]</p> <p>①具体的な活動や体験を通して、人や社会、自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせるといったその趣旨の一層の実現を図るため、人や社会、自然とかかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めるよう改善を図る。</p> <p>②<u>気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。</u>また、科学的な見方・考え方の基礎を養う観点から、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を取り入れる。</p> <p>③児童を取り巻く環境の変化を考慮し、安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実する。また、小学校における教科学習への円滑な接続のための指導を一層充実するとともに、幼児教育との連携を図り、異年齢での教育活動を一層推進する。</p>
2017年 (平成29年)	<p>具体的な活動や体験を通して、<u>身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u></p> <p>(1)<u>活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。</u></p> <p>(2)<u>身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。</u></p> <p>(3)<u>身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。</u></p>	<p>①改訂の基本的な考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活科においては、言葉と体験を重視した前回の改訂の上に、幼児期の教育とのつながりや小学校低学年における各教科等における学習との関係性、中学年以降の学習とのつながりも踏まえ、<u>具体的な活動や体験を通して育成する資質・能力(特に「思考力、判断力、表現力等」)</u>が具体的になるよう見直すこととした。</li> </ul> <p>②目標の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な活動や体験を通じて、「身近な生活に関する見方・考え方」を生かし、<u>自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを明確化した。</u></li> </ul>

#### (1) 1998(平成10)年の改訂及び2008(平成20)年の改訂における学習指導上の課題

生活科が新教科として設けられたときの教科目標は、1998(平成10)年の小学校学習指導要領では、教科目標に「人々」という言葉が追加されはしたが、次の2008(平成20)年の小学校学習指導要領では変更はなく、端的に言えば「具体的な活動や体験を通して、自立の基礎を養う」という教科目標が貫かれてきた。しかし、改善の基本方針に着目してみると、1998(平成10)年の改訂では「知的な気付きを大切する指導が行われるようにする」、2008(平成20)年の改訂では「気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する」というように、児童の「気付き」をいかに知的なものにするか、いかに質の高いものにするかということが学習指導上の課題として示された。そのため、2008(平成20)年の小学校学習指導要領では、児童の気付きの質を高める学習活動を充実させるために、その内容の取扱いに、「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えさせるため、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動を工夫すること」<sup>8)</sup>が明記された。

生活科での「気付き」とは、1989(平成元)年から2008(平成20)年までの小学校学習指導要領下での生活科特有の評価の観点の一つであり、他の教科でいう「知識・理解」に近いものではあるが、「知識・理解」と異なる点は、「気付き」は児童が主体的に関わる具体的な活動や体験を通して生まれてくるということである。つまり、教師から与えられた知識の理解ではなく、自らの思いや願いをもって主体的に活動や



体験をすることを通して考え、表現することで、実感を伴って「分かる」ことや「獲得する」ことである。<sup>9)</sup>

## (2) 2017(平成29)年の改訂における学習指導上の課題

2017(平成29)年の小学校学習指導要領は、2016(平成28)年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」を踏まえ、「教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す」<sup>10)</sup>という基本方針の下に改訂が行われた。そのため、全ての教科等の目標及び内容が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から成る資質・能力で再整理され、生活科の教科目標もそれまでのものと大きく構造が変わった。その構造とは、上段の柱書の部分と、下段の(1)から(3)の資質・能力の部分とに分けられ、2017(平成29)年の『小学校学習指導要領解説 生活編』では、柱書については、「生活科の前提となる特質、生活科固有の見方・考え方、生活科における究極的な姿である」<sup>11)</sup>とし、(1)から(3)の資質・能力については、「生活科を通して育成することを目指す資質・能力である」<sup>12)</sup>と解説している。

2017(平成29)年の改訂では、学習指導の改善・充実について、「これまでの生活科の課題として、学習活動が体験だけで終わり、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われてきていないという指摘があった」<sup>13)</sup>ことを踏まえて、「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気づきを確かなものとしたり、新たな気づきを得たりするようにするため、活動や体験を通して気付いたことなどについて多様に表現し考えたり、『見付ける』、『比べる』、『たとえる』、『試す』、『見通す』、『工夫する』などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視することとした」<sup>14)</sup>としている。

また、2017(平成29)年の小学校学習指導要領での「内容」においても、表2)のように、「～について考えることができ、～について分かり」「～を見付けることができ、～に気付く」「～を工夫してつくることができ、～に気付く」などのように、「考える」ことと「分かる」ことや「気付く」こととがセットで示されるようになった。このことから、児童の資質・能力として「考える」ことを重視し、「気づき」の質を高める学習指導が求められていることが分かる。(表の中の下線部分は、この本文に関係する文言である)

表2) 2017(平成29)年の生活科の「内容」の一覧

[学校、家庭及び地域の生活に関する内容]	(1) 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが <u>分かり</u> 、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。
	(2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて <u>考える</u> ことができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが <u>分かり</u> 、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。
	(3) 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について <u>考える</u> ことができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが <u>分かり</u> 、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。
[身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容]	(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることが <u>分かる</u> とともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。
	(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を <u>見付ける</u> ことができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること <u>に気付く</u> とともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

〔自分自身の生活や成長に関する内容〕	(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに <u>気付く</u> とともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。
	(7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって <u>働きかけ</u> ことができ、それらは生命をもっていることや成長していることに <u>気付く</u> とともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。
	(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを <u>想像</u> したり伝えたいことや伝え方を <u>選んだり</u> することができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが <u>分かる</u> とともに、進んで触れ合い交流しようとする。
	(9) 自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが <u>分かる</u> とともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。

このように、生活科が新設されて以降の小学校学習指導要領の改訂において、生活科の学習指導上の課題として示されたことを整理してみると、児童の「気付き」の質を高めるために、児童が「考える」ことを重視し、教科目標にある「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」を育成する学習指導を構想していくことが求められていると言える。

### 3 先行研究に見る児童の「気付き」の質を高める学習指導の考え方

關(2008)は、<sup>15)</sup> 生活科における現状の問題点や課題を明らかにするために、生活科が新設された1989(平成元)年に設立された「社会科系教科教育学会」の機関誌に掲載された研究論文を「①学習内容論(社会認識形成)に関する研究」「②学習指導方法論に関する研究」「③子供の気づき(能力形成)に関する研究」に分類している。ここでは、本稿と関連する「③子供の気づき(能力形成)に関する研究」の視点からいくつかの先行研究を取り上げて、児童の資質・能力として「考える」ことを重視し、「気付き」の質を高める学習指導の考え方について概観する。

広島大学附属小学校(1992)<sup>16)</sup>は、生活科でねらう学力として「方法的能力」を培うことを提唱している。この「方法的能力」とは、身近な自然的・社会的・文化的事象に働きかけ、自分との関わりを問う中で培われる「生活を科学する」ごく初歩的な力であり、問題解決的な方法を構成するような要素としての諸能力であるとし、表3)に示すような11項目で構成されている。また、これらの諸能力は、網羅的な扱いによって育てられるものではなく、問題解決的で活動的な単元構成の中で扱われ育てられるべきものであるとしている。

表3) 方法的能力の項目

方法的能力	生活的	①話す、聞く、読む (表現・対話) ②書く、描く (記録・作図) ③使う (利用・実践) ④作る (製作・工夫) ⑤育てる (飼育・栽培)
	科学的	⑥見る (観察・見学) ⑦調べる、集める、探す (調査・収集) ⑧比べる、分ける (比較・分類) ⑨まとめる (整理・統合) ⑩見通しをもつ、企てる (予想・計画) ⑪確かめる、試す (実験・検証)

世田谷区立多聞小学校(2001)<sup>17)</sup>は、「問題解決の力を育てる生活・社会・理科」の研究に取り組み、生活科の学習指導において、戦後の経験カリキュラムの課題を振り返り、どのような社会認識・自然認識を育てるのか、どのような能力を育てるのかということを明確にする必要があるとして授業実践を行っている。具体的には、社会や自然を認識する側面を「社会認識・自然認識の基礎」とし、さらに育成する資質・能力について、学び方、学習態度、学習意欲、実践的態度の四つの視点から「対象を見つめる力」「対象に働きかける力」「挑戦する順序を考える力」「考え判断する力」「自己を表現する力」「創り出す力」「感じる心」「追求する興味・関心・意欲」「実践的態度(生活に

生かす力)」「生活技能、態度、習慣」の10項目を設定し、授業実践に取り組んでいる。また、これらの資質・能力を育成するための学習過程は、「対象に出会い、それが動機付けとなり、児童一人一人がやってみたいという意欲が盛り上がる。そして、その活動の見通しを立て、個人あるいはグループや全体で試行し、失敗し、再挑戦しながら、一人一人の児童が成就感を味わい、さらに発展していく」というものであるとしている。

内藤(2005)<sup>18)</sup>は、児童の気付きの質を深めるために、広島大学附属小学校が1992年に提案した「方法的能力」を基にして、自他の授業実践から次のような5つの「知的活動」を導き出している。「①比べる、見つける活動」とは、対象の特徴に気付かせるために二つ以上の対象の共通点や差異点を取り出す活動である。「②調べて、考える活動」とは、疑問点を明らかにするために、図鑑や本を読んだり、辞書を引いたり、インターネットを検索したり、人から聞き取ったりしたことなどを基に、その事実・事象が他のどのような事実・事象とどのようにつながっているのかについて、発見させる活動である。「③見通しながら企てる活動」とは、問題の解決に向けて困難な点を克服するためのアイデアを出し合い、実現するための計画を立てる活動である。「④試行錯誤しながら工夫する活動」とは、児童が自分の思いや願いに基づき、実現しようとするいろいろなことを試み、失敗を重ねながら目的に迫っていく過程をとる問題解決活動である。「⑤語り合い、意思決定する活動」とは、自分の気がかりや悩みを解決したり、夢や願いを実現したりするために、相互に対話を繰り返しながら、心配な点やその解決策を話し合う活動である。また、学習過程については、漠然とした大きな問題を一つ解決するという構成ではなく、「小刻みな問題解決の連続」で構成し、児童が小さな具体的な問題を連続的に解決していったときに、「自立」していくと述べている。

關(2008)<sup>19)</sup>は、生活科は社会や自然、文化に関する内容を総合的に学びながら、その共通の基盤となる学び方、「方法原理」を学ぶことが必要であるとしている。「方法原理」を学ぶというのは、具体的には、問題の発見・予想・推論といった過程を経る探究的な学習の前段階を生活科で学ぶこととし、教師は児童への「かわり」として、「なぜそのように考えたのか、なぜそのように判断したのか」といった解決のための思考を喚起させる働きかけを具体的にしていく必要があるとしている。また、生活科の授業においては、比較・分類思考を中核に据え、児童の気付きを再構成することが必要であるとし、ただ、単に活動や現象、事象を比較するのではなく「ゾーニング」という手法を取り入れて、児童の思考を喚起することを提唱している。この「ゾーニング」とは、「子供の基準で自由に仲間分けをして、子供の言葉で定義づけをすること」と位置付けている。さらに、児童の思考形成は、「意識づけ」→「関係づけ」→「意味づけ」というプロセスによって、児童がもっている事実体系と価値体系が、相互に作用しながら思考が深化すると述べている。

岡崎(2020)<sup>20)</sup>は、2017(平成29)年の小学校学習指導要領で実現が求められている「深い学び」について、生活科においては「気付きの質の高まり」とイコールで結び付けられるものであるとし、「小学校学習指導要領解説 生活編」の内容を分析した上で、「深い学び」の構成要件を、図1)のように図式化している。

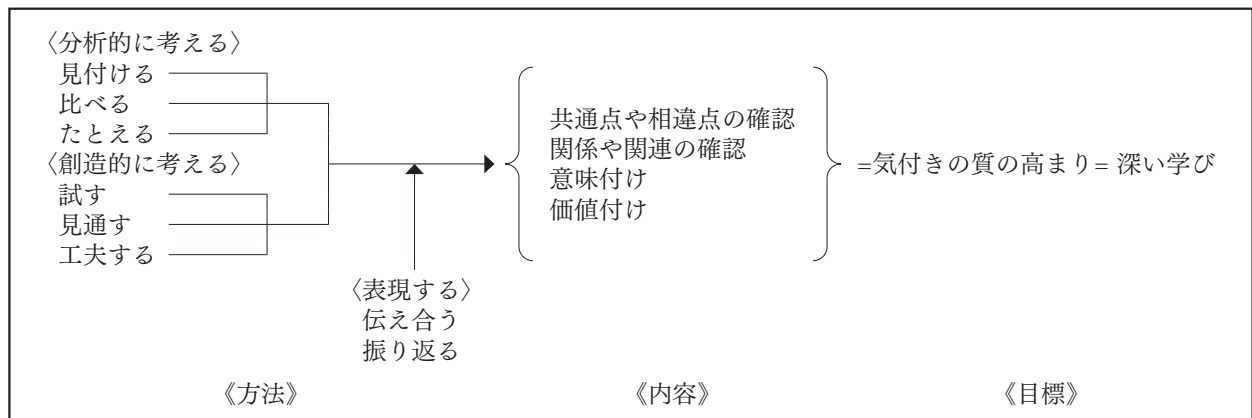


図1)「深い学び」の構成要件



また、「深い学び」を実現するための手だてについて、生活科の授業実践を「分析的に考える」活動や「創造的に考える」活動、「表現する」活動の視点から分析して、「①問題解決過程としての単元構成」「②改善策を交流する場の設定」「③立場の転換」の三点を挙げている。さらに、「深い学び」は、児童が「創造的に考える」ことによって実現できるものであるとし、「創造的に考える」ためには、児童自らが解決を必要とする切実な問題意識と自主的・自発的活動が不可欠であり、生活科は問題解決学習を継承していると述べている。

このように、「気付き」の質の高まりや深まり、さらには方法的能力という視点からいくつかの先行研究を概観すると、「考える」という方法的能力を明確に位置付けて問題解決的な学習を実践していくことによって、「気付き」を質的に高めるという学習指導の考え方を捉えることができる。生活科の学習指導の課題は、いかに授業において児童の「気付き」の質を高めたり、そのために必要な考える力を育成したりすることができるかということである。これまで、小学校学習指導要領の改訂のたびに指摘されてきた、「活動あって学びなし」といった授業を実践しては育成することはできない。生活科の授業づくりにおいては、あくまでも具体的な活動や体験を基盤にしながら、児童が「考える」ことを重視して「気付き」の質を高めるという考え方を踏まえて学習指導を構想していくことが重要である。

#### 4 児童の「気付き」の質を高める学習指導の構想の視点

第2章では、小学校学習指導要領における生活科の教科目標と新設及び改訂の趣旨等の変遷を整理し、生活科の学習指導上の課題として示されたことを確認した。また、第3章では、「子供の気づき（能力形成）に関する研究」の視点からいくつかの先行研究を取り上げ、児童の資質・能力として「考える」ことを重視して「気付き」の質を高める学習指導の考え方について概観した。ここでは、これらのことを踏まえて、「資質・能力の育成に資する生活科の授業づくり」における、「児童の『気付き』の質を高める学習指導の構想の視点」についての知見を3点述べる。

##### ①単元における学習過程を問題解決的な構成にすること。

児童の「気付き」の質の高まりは、児童が主体的に「考える」ことを通して獲得されるものである。そのため、児童の生活圏にある人、社会、自然を学習の対象や場として、児童の思いや願いを喚起し、切実な問題意識をもって主体的に追究できるようにするために、問題解決的な学習過程で単元を構成するようにする。

例えば、2017（平成29）年の「小学校学習指導要領解説 生活編」では、学習指導の進め方について「繰り返し自然事象と関わったり、試行錯誤して何度も挑戦することは気付きの質を高めることになる」<sup>21)</sup>として、「試行錯誤や繰り返す活動を設定する」と述べている。この考え方と類似するものとして、図2)のような世田谷区立多聞小学校の生活科の学習過程<sup>22)</sup>を挙げることができる。このような学習過程を参考にして、単元における学習過程を問題解決的に構成していく必要がある。

##### ②単元において児童に獲得させたい「気付き」を明確にして授業を構成すること。

児童の「気付き」の質を高めていくためには、単元において児童に獲得させたい「気付き」とはどのようなことなのかについて明確にして学習指導を行わなければならない。そのため、2017（平成29）年の小学校学習指導要領に示された各内容項目を基にして、児童にどのような「気付き」を獲得させたいのか分析・

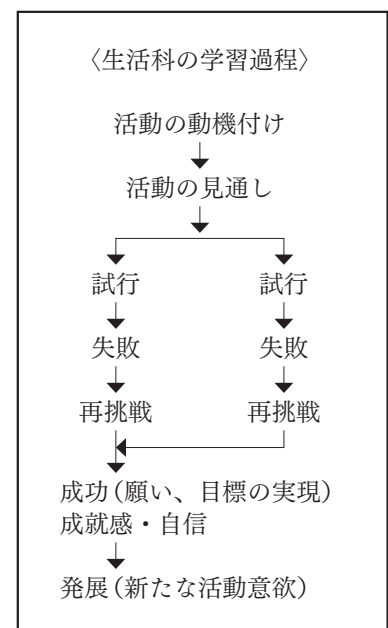


図2) 生活科の学習過程

検討した上で具体化し、授業を構成するようにする。

例えば、板橋区立上板橋第四小学校<sup>23)</sup>は、表4)のように「想定される主な子供の思いや願い」に即して、「子供が獲得できるようにしたい気付き」を明確にして単元を構想し、授業実践に取り組んでいる。このような単元の構想についての考え方を参考にして授業を構成していく必要がある。

表4) 第1学年 生活科 単元名「がっこうだいすき」(全19時間)の単元の構想

過程	想定される主な「子供の思いや願い」		子供が生かしたい見方・考え方		見方・考え方を生かすための資料・活動	子供が獲得できるようにしたい気付き
を思いや願い	①わたしたちの学校には、どんな「ところ」「もの」があり、「ひと」がいるのだろう。	→	自分たちの学校生活と学校施設や教職員等との関連付け	→	・学校生活を振り返り、経験や気付きを学校の白地図に貼る。	・学校には、様々な部屋や場所があり、上級生や教職員などたくさんの人が働いている。
活動する↓考える・感じる	<div>学校探検をしよう</div> ②どんな場所、ものがあり、人がいるのだろう。 ③ものは何に使うのだろう。人は何をしているのだろう。 ④その人は、何のためにしているのだろう。	→	自分の学校生活との関連付け	→	・探検計画を立てる ・学校探検をする。(インタビューも含む)	・学校には様々な活動をする部屋や、それを担当する人がいる。
		→	ものの役割や人の働き	→	・気付きを表現し交流し合う。	・ものは学習や生活を支えていたり、働く人は様々な仕事をしていたりする。
		→	仕事の意味や働き	→	・新たに生まれた疑問を解決するために再び探検する。	・働く人は、みんなの学習や生活に関わる仕事をしている。
伝え合う・振り返る	⑤発見したことを友達や家の人に伝えてみたい。	→	気付きの比較・関連付け	→	・単元の学習を振り返る。 ・「わたしたちの上四小発表会」をする。	・学校の施設や人々は、それぞれ役割や特徴があり、自分たちの学校生活を支えている。
	⑥通学路で見守ってくれている人は、どのような思いなのだろう。	→	人の思いや願いの想起	→	・通学路を探検したり、インタビューをしたりする。	・通学路では、学校だけではなく地域の皆さんも一緒に自分たちの安全を守ってくれている。
	⑦楽しく安全な学校生活を送るためには、どのようにしたらよいのだろう。	→	これまでの学びと生活との関連付け	→	・これからの生活を考える。	・楽しく学校生活を送るために、先生や地域の方、友達によりよく関わるとともに、ルールやマナーを守って生活することが求められている。

③意図的・計画的に「考える」活動を重視した授業を構成すること。

児童の「気付き」の質を高めていくためには、「考える」活動を重視し、それらを授業展開のなかに意図的・計画的に位置付けて学習指導を行わなければならない。そのため、2017(平成29)年の小学校学習指導要領の内容の取扱いに示された、「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」「見通す」「工夫する」などの多様な学習活動の趣旨を十分に吟味・検討しながら児童が「考える」活動を具体的に構想し、それを位置付けた授業を構成するようにする。

例えば、内藤<sup>24)</sup>は、表5)のように「学習活動と内容」に即して、「比べて見つける活動」「見通しながら企てる活動」「語り合い意思決定する活動」といった「知的活動」を位置付けて単元の指導計画を立て授業



実践に取り組んでいる。このような単元の指導計画の作成の考え方を参考にして授業を構成していく必要がある。

表5) 第1学年 生活科 単元名「カブトムシとなかよし」(全18時間)の単元の指導計画

学習活動と内容	主な手だて	知的活動	配時
1 カブトムシの幼虫と出会い、飼育をする。 (1) カブトムシの幼虫に触れ、気付きや思いを出し合う。 ○幼虫の体の特徴や、幼虫への思いを取り出すこと	○抵抗を少なくするために、班で一匹の幼虫を暫くの間、飼育させておく。		5 ②
(2) カタツムリの家との比較から、カブトムシの幼虫の家の条件を話し合う。 ○土が住み家でもあり、食べ物でもあることから、土の深さと土の質に着目する必要があることに気付くこと	○カタツムリの家を提示し、「これと同じでいいか」と問いかける。	比べて見つける活動	①
(3) カブトムシの幼虫の家をつくる。 ○一人一匹の飼育に向けて気持ちを高めること	○腐葉土と運動場の土を比べさせ、その違いに着目できるように促す。	比べて見つける活動	②
2 カブトムシの土を補充する。 (1) 土が減ってきているという事実を知る。 ○このままでは、土がなくなるという危機感をもつこと	○土の減り具合が具体的に分かるように土の「高さ」に印を付けさせておくことを促す。	比べて見つける活動	8 ①
(2) 土の買い物の計画を立てる。 ○店への行き方や土の値段と量など見通しをもつこと	○まず、腐葉土を売っていない店に連れ出し、売っている店に行きたいという気持ちを高めさせる。	見通しながら企てる活動	④
(3) 土の買い物に行く。 ○買い物ができたという有能感をもつこと	○領収書の貰い方を指導しておく。	見通しながら企てる活動	③
3 成虫になったらどうするか語り合う。 (1) 成虫になったらどうするか語り合う。 ○カブトムシの愛情を基盤に、成虫の適した環境や人間と生き物の「望ましい」関係を自分なりに考えること	○幼虫の段階から複数回「成虫になったらどうするか」というテーマで話し合わせ、小刻みに意思を決定させていく。	語り合い意思決定する活動	5 ④
(2) 新しく生まれた卵、幼虫を見て、気付きを出し合う。 ○命の連続性を実感として気付くこと	○「新しい」幼虫がこの後、どうなるのか、予想させ、命の連続性を気付くことができるようにする。		①

## 5 おわりに

本稿では、「資質・能力の育成に資する生活科の授業づくり」として、「児童の『気付き』の質を高める学習指導の構想の視点」についての知見を述べた。2017(平成29)年の小学校学習指導要領では、児童の「気付き」の質を高めるためには、児童が「考える」活動として、「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」「見通す」「工夫する」などの多様な学習活動を行うことが重要であるとしている。そのことも踏まえながら、今後の課題について記す。

- ①「児童の『気付き』の質を高める学習指導の構想の視点」を踏まえて学習指導案を作成し、授業実践における児童の学びの姿を分析し、その有効性や課題を明らかにしたい。
- ②「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」「見通す」「工夫する」などの多様な学習活動の趣旨について、授業実践における児童の学びの姿をもって明らかにしたい。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部省「小学校指導書 生活編」(1989.6) 1頁
- 2) 野田敦敬「生活科で育った学力についての調査研究」日本生活科・総合的学習教育学会学会誌「せいかつか&そうごう 第12号」(2005) 100-109頁
- 3) 松永あけみ「小学校教科生活科に関する大学生の意識調査」明治学院大学『心理学紀要第28号』(2018) 49-57頁
- 4) 關浩和「教育課程における生活科の存在意義－比較・分類思考形成をめざす生活科授業に－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究 第20号』(2008) 11-20頁
- 5) 山田風沙・桑原敏典「社会認識の基盤形成を目指した生活科授業の構想－人々との関わりを捉えさせる食育プログラムの開発を事例として－」岡山大学『教師教育開発センター紀要 第12号』(2022) 17-31頁
- 6) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016) 21頁
- 7) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」(2017.7) 7頁
- 8) 文部科学省「小学校学習指導要領 第2章 第5節 生活」(2008)
- 9) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」(1999.5) 2-5頁、62-63頁
- 10) 前掲。文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」(2017.7) 2-3頁
- 11) 同上 8頁
- 12) 同上 8頁
- 13) 同上 69頁
- 14) 同上 7頁
- 15) 前掲。關浩和「教育課程における生活科の存在意義－比較・分類思考形成をめざす生活科授業に－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究 第20号』(2008) 11-20頁
- 16) 広島大学附属小学校・生活科教育研究会「方法的能力を培う生活科の授業」社団法人学校教育研究会(1992.1)
- 17) 世田谷区立多聞小学校「自分の力で考え、生涯にわたって学習する子ども－問題解決の力を育てる生活・社会・理科」平成2・3年度 研究紀要(2001.3)
- 18) 内藤博愛「気付きを深める生活科の授業の創造－5つの『知的活動』で子どもの学びが変わる!－」明治図書(2005.12)
- 19) 前掲。關浩和「教育課程における生活科の存在意義－比較・分類思考形成をめざす生活科授業に－」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究 第20号』(2008) 11-20頁
- 20) 岡崎誠司「『深い学び』を実現する生活科の授業構成－第1学年単元「あきのたからものであそぼう」の場合－」富山大学人間発達科学部紀要 第15巻第1号(2020) 33-40頁
- 21) 前掲。文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」(2017.7) 95頁
- 22) 前掲。世田谷区立多聞小学校「自分の力で考え、生涯にわたって学習する子ども－問題解決の力を育てる生活・社会・理科」平成2・3年度 研究紀要(2001.3) 13頁
- 23) 板橋区立上板橋第四小学校「第1学年 生活科指導案」(2023.7.3)
- 24) 前掲。内藤博愛「気付きを深める生活科の授業の創造－5つの『知的活動』で子どもの学びが変わる!－」明治図書(2005.12) 121頁